

小学校 図画工作科教育法

編著

山口喜雄・佐藤昌彦・奥村高明

大泉義一・川路澄人・清田哲男・竹内晋平
長瀬達也・西園政史・西村德行・畑山未央
藤井康子・降旗 孝 共著

建帛社
KENPAKUSHA

はしがき

「変化する社会への対応」が学校教育，そして美術教育に求められてきました。その際，現代の先端にあった二人の先達の見方が参考になります。

丸山真男は，1961年刊『日本の思想』（岩波新書）のなかで，基底に共通した伝統がなく，最初から専門に分化した閉鎖的な日本社会を「タコ壺文化」と比喻して，基底に「共通の広場」がある西洋文化との相違を際立たせました。美術教育にも，絵画・彫塑・デザイン・工芸・鑑賞という専門領域があり，ともすれば「タコ壺文化」に陥りやすい現実があります。専科制度がある地域を除き，図画工作は美術を専門としない小学校教師が授業を担当するため「共通の広場」を必要とします。

また，「創造性」というと美術や芸術分野の用語と思ひ込みやすいですが，対極にある科学でも重視しています。1949年日本人ではじめてノーベル賞を受賞した湯川秀樹は「創造性と自己制御」（『創造的人間』筑摩叢書，1966年刊）において，物理学の創造性の問題を核兵器の例示で人間世界への影響を考える自己抑制の重大性を述べています。図画工作学習においても多様な創造的体験が子どもたちの生涯に及ぼす影響を深慮した授業が大切です。

さて，2017（平成29）年3月に学習指導要領が改訂され，本書もそれに準拠しています。しかし，それを金科玉条として思考停止に陥らないように留意する必要があります。ルールの押しつけになっては本末転倒ですので，その授業がなぜ必要なのか，どのような子ども像が求められているかなど，背景にある理念や願いは何かを考える姿勢が求められています。そして，図画工作科だけにとらわれず，この教科をよりよく発展させるためには教育全体から検討することも視野に入れておくことが重要です。

本書は，建帛社刊行の『初等教育図画工作科教育の研究』（1979年），『小学校図画工作科教育の研究』（1993年），『小学校図画工作科指導の研究』（2000年），『小学校図画工作科の指導』（2010年）の系譜を受け継ぐ5冊目です。それらは各期における小学校図画工作科教育の指針となってきました。本書においても，授業者一人一人が小学校図画工作科の指導に責任をもつことができるように，過去・現在・未来を俯瞰して，今後の指針となる内容に編集いたしました。本書の内容を自身の経験や考えに照らして，自分の言葉や行為に責任をもつ，このことは子どもの前に立つ指導者としての要と思われます。

本書『小学校図画工作科教育法』は，読者の立場を考慮した編集をいたしました。教員養成大学の学部生には，基本事項，図・表・写真，用語解説で理解しやすくしました。教職大学院生には，沿革，社会・文化状況あるいは理論との関連，関連論文紹介で多彩な活用方法を提示しています。小学校教諭には，新しい視点に立った学習指導案例，多様な授業実践例，言語活動の例示等で授業化しやすく

II 目次

いたしました。指導主事には、初任研・研修会での指導や活用が可能な構造、各章関連の代表的著書解題が有効です。大学教員には、全15回の授業に添う章立て、研究視点の明示、国内や世界の動向の把握をしやすいしました。さらに、「共通の広場」としてそれぞれの立場が相互にはたらくようご活用いただければ幸甚です。不十分な点にお気づきの場合は忌憚のないご叱正を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

末筆ですが、ご多忙な時期に本書編集の趣旨をご理解いただき創造性と熱意の溢れる寄稿をしてくださった共編著者各位、ならびに本書への資料提供等のご協力いただきました皆様に深謝申し上げます。また、本書刊行に多大なご理解とご支援を賜りました建帛社会長の筑紫恒男氏、ならびに編集担当をはじめ、関係各位に感謝の意を表します。

2018年3月
編著者を代表して
山口喜雄

目 次

第1章 図画工作科教育のベース

1. 人類にとっての造形活動と図画工作	1
(1) 歴史資料は造形の表現史	1
(2) 図画工作は未来の造形・美術文化を形成する教科	1
2. 小学生が大好きな図画工作の課題	2
(1) 「好き」25年間総合ランキング1位は図画工作	2
(2) 図画工作好き2位90%だが、大切さは9位75%	2
3. 図画工作を「好き」になる二つの主因	3
(1) 授業は子どもたちに対する「教師の愛情表現」	3
(2) 体験を通して「英知」を身につける図画工作	4
4. 「大切」と思われない四要因と改善策	4
(1) 授業者の学習者に対する「態度」	5
(2) 造形表現が得意な人のための教科という誤解	5
(3) 「うまく描けない」悩み	6
(4) 「真似はダメ」の真相	6
5. 図画工作「不要論」日米での歴史的な経験	7
(1) 造形感覚の陶冶は科学技術の基礎	7
(2) 諸感覚を目覚めさせる図画工作	9
6. 21世紀の二大危機を救う図画工作学習	10
(1) 二大危機「地球の破局と人類滅亡」	10
(2) 二大危機を克服する図画工作科の目標	11

第2章 個性概念と造形表現の発達

1. 21世紀における図画工作教育の原点	15
(1) 自由画教育運動の先見性と限界	15
(2) 言語活動による価値の創造過程で生まれる文化	16
(3) 造形能力を左右する学習機会と時代の感性	16
2. 発達の概念と「個性」の形成	18
(1) 「発達 (development)」概念と現代学校教育の三つの問題点	18
(2) 図画工作を通した「感性」による教育の意義	19
(3) 豊かな「個性」を培う言語と造形言語による学習	21
3. 子どもの造形活動の発達	22
(1) 子どもの造形表現の発達研究	22
(2) 現代日本の子どもの造形活動の発達事例	22
(3) 空間表現の発達と人間形成	25

IV 目次

(4) 人間形成としての図画工作の学習指導	25
(5) 21世紀に生きる力を育む図画工作・美術	26

第3章 学習指導要領の発展と図画工作

1. 学習指導要領の意味	28
(1) 学習指導要領の必要性	28
(2) 学習指導要領の構造	29
2. 学習指導要領の歴史的変遷（昭和22年～平成20年）	29
(1) 昭和22年版学習指導要領（試案）（1947年）	29
(2) 昭和26年版学習指導要領（試案）改訂版（1951年）	30
(3) 昭和33年版学習指導要領（1958年）	32
(4) 昭和43年版学習指導要領（1968年）	33
(5) 昭和52年版学習指導要領（1977年）	34
(6) 平成元年版学習指導要領（1989年）	35
(7) 平成10年版学習指導要領（1998年）	36
(8) 平成20年版学習指導要領（2008年）	38
3. 平成29年版学習指導要領改訂の主な内容	39
(1) 三つの柱で明確化された「社会に開かれた教育課程」	39
(2) 図画工作の改訂の要点	40

第4章 児童の造形と造形遊びの指導

1. 遊びの意義と児童の造形活動	42
(1) 人間にとっての「遊び」の意義	42
(2) 造形活動と遊び	42
2. 造形遊びとは何か	43
(1) 造形遊びの特質	43
(2) 造形遊びにおける学び	44
(3) 造形遊びと材料・用具	44
(4) 造形遊びを通して育む資質・能力	45
3. 造形遊びの内容	47
(1) 低学年	47
(2) 中学年	49
(3) 高学年	51

第5章 心象表現と絵の表現指導

1. 絵の概念と子どもの絵の心象表現	55
(1) 小学校図画工作科の絵の諸課題	55
(2) 子どもにとっての絵の意義	56
(3) 子どもの絵に求められてきたこと	57

2. 絵に表す活動とは何か	59
(1) 絵に表す活動の特質	59
(2) 絵に表す活動における学びのあり方	60
(3) 絵に表す活動を広げる材料・用具	60
(4) 絵に表す活動を通して育む資質・能力	61
3. 低・中・高学年の絵の授業の実際	62
(1) 低学年	62
(2) 中学年	63
(3) 高学年	66

第6章 空間認識と立体の表現指導

1. 空間感の形成と子どもの立体表現	68
(1) 立体表現における空間認識の意味	68
(2) 子ども期の立体表現の発達	68
2. 立体に表す活動とは何か	69
(1) 立体に表す活動の特質	69
(2) 立体に表す活動における学び	70
(3) 立体表現を広げる材料・用具	70
(4) 立体に表す活動を通して育む資質・能力	72
3. 低・中・高学年の立体表現授業の実際	73
(1) 低学年	73
(2) 中学年	75
(3) 高学年	78

第7章 適応表現と工作の表現指導

1. 自律的に生きぬく人間像と適応表現	81
(1) 自律的に生きぬく人間像をめざす図画工作	81
(2) 人間形成に不可欠な適応表現	82
2. 未来を拓く中央教育審議会の答申と小学校学習指導要領	82
(1) 未来にかかわる「創造」—中央教育審議会の答申—	82
(2) 小学校学習指導要領解説総則編と小学校学習指導要領解説図画工作編	83
3. 子どもが大好きな工作に表す活動と授業づくりのポイント	83
(1) 工作に表す活動	83
(2) 授業づくりのポイント	84
4. 「工作に表す活動」に関する教材研究の実際	86
(1) 「音の出る仕組み」からの発想	87
(2) 「開いたり閉じたりする動き」からの発想	87
5. 歴史への眼差し—工作・工芸教育の重要性に対する認識を深めるために—	87
(1) IFEL工作科教育の開催（1952年）	88
(2) 昭和44年版学習指導要領の改訂（1969年）	89

6. 世界への眼差しー工作・工芸教育発祥地：フィンランドの教育ー	90
----------------------------------	----

第8章 平面作品の鑑賞

1. 文化としての鑑賞活動ー表出描画の感受から表現意図への感得へー	95
(1) 出会う	95
(2) 共有する	97
(3) 生み出す	99
(4) 伝える	100
2. 鑑賞指導における空間感の感受	101
(1) 空間認識の発達と感じ方	101
(2) 空間認知	102
(3) 空間認知と描画	102
3. 心象表現の鑑賞指導	104
4. 適応表現の鑑賞指導	106
5. 子どもが学びに向かう鑑賞	106

第9章 立体作品の鑑賞

1. 自然環境、生活環境における立体とのかかわり	107
(1) 私たちの生活空間と立体	107
(2) 平成29年版学習指導要領における立体の鑑賞	108
2. 立体作品の鑑賞の方法	109
(1) 心象表現の鑑賞方法	109
(2) 立体鑑賞のポイント	110
(3) 適応表現（工芸・デザイン）の鑑賞方法（機能性・使い心地など）	112
3. 立体作品の鑑賞に関する授業の実践	113
(1) 授業づくりのプロセス	113

第10章 〔共通事項〕を踏まえた学習指導

1. 図画工作における指導内容の構成	119
(1) 「A表現」及び「B鑑賞」と〔共通事項〕の関係	119
(2) 〔共通事項〕設定の経緯	119
(3) 〔共通事項〕をイメージする	122
2. 学習指導要領における〔共通事項〕の表記	123
(1) 平成20年版学習指導要領から平成29年版学習指導要領へ	123
(2) 学年による〔共通事項〕の違い	124
3. 学生の指導案から読み取る共通事項	125
(1) 〔共通事項〕の指導ポイント	125
(2) 学生Aによる指導案	126

第11章 可能性を伸ばす図画工作の評価

1. 図画工作における評価とは	130
(1) 評価の意義と役割	130
(2) 代表的な評価概念とその方法	131
(3) 評価と教師の教育観との関連	131
(4) 作品と図画工作の評価	132
2. 新しい学習指導要領と評価の観点	132
(1) 「知識・技能」についての評価	133
(2) 「思考力・判断力・表現力等」についての評価	134
(3) 「学びに向かう力、人間性等」についての評価	135
3. 児童・教師の可能性を伸ばす評価を実現するために	135
(1) 一人一人の児童の学びに寄り添い見て取る過程	135
(2) 一人一人の児童の学びの過程を客観的に記録	136
(3) 児童がお互いに可能性を伸ばし育つ授業の展開と評価	136
(4) 可能性を伸ばす評価を支える学習空間	137
(5) 児童だけでなく教師自身の可能性を伸ばす評価	137
4. 可能性を伸ばす評価の実践（自己評価と相互評価）	138

第12章 伝統や文化に関する教育と図画工作

1. 教育の目的と図画工作科における伝統や文化に関する教育	141
(1) 教育の目的	141
(2) 伝統や文化に関する教育	142
2. 図画工作科と伝統や文化に関する教育の充実	143
(1) 教材としての教育的意義	143
(2) 教育的意義を探るための三つの観点	143
(3) 伝統や文化に関する教育実践	145
(4) 世界における伝統や文化に関する教育実践—中国：「 ^{せんし} 剪纸／切紙」—	147
3. 鑑賞領域の改善と「生活の中の造形」（5・6学年の鑑賞）	
—地域の伝統的な造形「沖縄のシーサー」を事例として—	147
4. 世代を超えた叡智の受け渡し	
—科学技術と造形芸術（伝統や文化）の連動を通して—	148

第13章 図画工作科における教科書・美術館の利活用

1. 図画工作科における教科書の利活用	151
(1) 教科書の定義と図画工作における配慮	151
(2) 学校教育の課題と図画工作科教科書の変遷	151
(3) 授業で図画工作科教科書を活用するために	155
(4) 図画工作科におけるデジタル教科書およびICT機器の利活用	156

2. 地域の美術館などの利用や連携の充実	157
(1) 学習指導要領における美術館などの利用や連携の課題	157
(2) 子どもの学びと美術館体験	158
(3) 美術館訪問の留意点と教師の役割	160

第14章 国内外の美術教育研究の動き

1. 国内外の美術教育研究の動きを学ぶ意義	162
(1) これからの美術教育研究に求められるもの	162
2. 日本と諸外国の美術教育研究（1945年以前）	162
(1) 日本：実利的な図画教育から「人間教育としての美術教育」へ	162
(2) 諸外国：芸術の教育から「芸術による教育」へ	163
3. 日本と諸外国の美術教育研究の動き（1945年以降）	164
(1) 日本：起点としての『米国教育使節団報告書（第一次、第二次）』	164
(2) 日本：美術教育研究団体の設立と民間美術教育運動	164
(3) 諸外国：芸術教育論の類型化と実証的な研究の展開	167
(4) 諸外国と日本：InSEAを通じた美術教育研究の国際交流	168
(5) InSEA国際会議における日本人の活躍	169
4. 21世紀初頭の諸外国の美術教育事情と研究の視点	169
(1) 諸外国の最新の美術教育事情	169
(2) 美術教育の今日的課題～芸術効果の測定と検証～	171

第15章 世界的・社会的視野での図画工作研究

1. 世界的・社会的視野と図画工作	173
2. 世界の図画工作カリキュラムと実践	173
(1) 欧米の美術教育	173
(2) アジアの美術教育	177
(3) 国際比較からとらえる日本の図画工作教育	180
3. 社会に開かれた教育課程と図画工作	180
(1) 社会に開かれた教育課程とは	180
(2) 社会に開かれた図画工作教育のあり方	182
(3) 図画工作科における社会に開かれた教育課程とその実践	183

巻末資料：平成29年小学校学習指導要領 図画工作	187
索引	191

第1章 図画工作科教育のベース

1. 人類にとっての造形活動と図画工作

(1) 歴史資料は造形の表現史

類人猿から進化する過程、さらに有史以降も、人類は造形活動を通して、礫石器→打製石器→骨角器→弓矢→磨製石器→土器→金属器などの利器を創造的に発達させて生存を守り、生活を豊かにしてきた。生活用具から神殿や巨石墳墓に至るまで多様な造形方法は、各地の家族・部族・民族・国家など諸々の集団内で受け継がれてきた。様々な歴史資料に掲載された遺跡・遺構・遺物は造形の表現史でもあり、造形を抜きに人類の歴史は語れない。また、パルテノン神殿（図1-1）をはじめ歴史的な建造物や造形作品には芸術美が備わっている。



図1-1 アテネのパルテノン神殿 世界遺産、紀元前5世紀建造

(2) 図画工作は未来の造形・美術文化を形成する教科

図画工作は、自分らしい気持ちや意図をもとに〈描き・つくる〉という「表現」、あるいは創造された造形作品の形・色・材質感の部分や総体から〈感じとり・伝え合う〉という「鑑賞」を相関的に学ぶ教科である。両者の学習をあわせて造形活動といい、造形言語能力がそれらと深い関係がある。聞き・話し・読み・書くという言語によるバーバル・コミュニケーション能力が大切であるように、造形言語を含む非言語のノンバーバル・コミュニケーション能力も車の両輪のように人間形成にとって必要不可欠である。子どもたち一人一人が図画工作を通して獲得する造形言語能力の発達の集積が、人類の未来における豊かな造形・美術文化を形成する基盤となる。



図1-2 アテネ、129区国立小学校4年生の図画工作（プリンティング）の授業参観（2014）

現代的学校教育が施行されている国々では、図画工作は日本と同様に必修教科である。しかし、小・中学校での学習指導が不十分だと、「絵は苦手、人前で描くのも見られるのも嫌い」との忌避の感情、「受験科目にないから、図画工作や美術は才能がある人がやればよい」との軽視の傾向を生じさせやすい。そのため、図画工作科教育のベース（表1-1）を理解することが大切である。

表1-1 図画工作科教育のベースとなる三つの用語

■美術	■図画工作	■造形
「美術*」は芸術を意味する明治の新語で、1873（明治6）年にウィーンで開かれた万国博覧会に明治政府が参加した際、音楽、絵画、彫刻、詩などをさす語として造語された。 参考）青木茂、酒井忠康：美術、岩波書店、1989、pp.402-407 *現在は視覚芸術の意で用いている。	1872（明治5）年の学制で教科名は上等小学「幾何学算画大意」、1881年に「図画」となり、目標は「眼及手ノ練習ヲ主トシ」であった。1886年に「手工科」設置、1941年「工作」となり、戦前の図画と工作は別教科であった。 参考）山形寛：日本美術教育史、黎明書房、1967、pp.12-16、pp.449-751	文字通り形造ることで、用や美の秩序や価値を求めてつくられたもの、色や形あるものでつくり、表したりすることという。造形性は物的材料の表現、空間が存立の基盤、触覚・運動感覚も含み視覚を主軸とする。 参考）真鍋一男退官記念論集：現代造形・美術教育の展望、1992、pp.10-18

2. 小学生が大好きな図画工作の課題

(1) 「好き」25年間総合ランキング1位は図画工作

民間大手の教育研究所が1990～2015年に大都市（東京23区内）・地方都市（四国県庁所在地）・郡部（東北地方）の約2,500名の小学5年生を対象として行った調査の「好きな教科・活動ランキング」を表1-2に示した。その結果は、75.8～86.6%が図画工作を「とても好き」および「まあ好き」と回答し、常に1～3位であった。25年間全5回の総合ランキングでは、1位が図画工作、僅差で2位体育、3位家庭であった。

表1-2 小学生の「好きな教科・活動ランキング」

■5年生の好きな教科は過去25年間どう変化したか？ 「とても好き」+「まあ好き」(%)

	1990年	1996年	2001年	2006年	2015年
1位	体育 79.4	図画工作 86.5	図画工作 83.6	体育 84.9	家庭 90.2
2位	図画工作 75.8	家庭 82.7	体育 81.6	家庭 84.3	図画工作 86.5
3位	理科 71.4	体育 80.9	家庭 79.6	図画工作 79.1	体育 83.1
4位	家庭 67.8	理科 71.3	音楽 69.7	理科 68.5	英語活動 77.6
5位	音楽 57.6	音楽 62.2	理科 68.2	総合 67.0	理科 75.2
6位	国語 52.2	国語 61.0	総合 61.0	音楽 66.8	総合 74.4
7位	算数 51.8	算数 53.1	算数 55.6	算数 62.8	音楽 71.5
8位	社会 50.9	社会 51.4	国語 54.7	国語 53.4	算数 68.4
9位			社会 49.6	社会 48.0	国語 58.5
10位					社会 55.6

参考）木村治生編：第5回学習基本調査DATA BOOK，ベネッセ教育総合研究所，2016，p.27

調査月 1990年9～10月 1996年5～6月 2001年5～6月 2006年6～7月 2015年6～7月

5年生 2,578名 2,666名 2,402名 2,726名 2,601名

(2) 図画工作好き2位90%だが、大切さは9位75%

同様の調査は地方公共団体でも行われ、宇都宮市は2006年から在籍小学生全員を対象に多項目のアンケート調査を続けている。表1-3に2016年の29,104人への調査結果を両項目並置で集約した。

その中の「次の教科などの学習は、好きですか」と「次の教科などの学習は、将来のために大切だと思いますか」の項目の対比では、図画工作は深刻な結果を示している。生活・道徳・学級活動他を除き、総合・英語活動を含む全10種の「好きな教科」等における図画工作の順位と百分比は、1年から6年の順に1位92.3、2位89.6、2位90.6、1位92.6、3位88.9、4位85.7、小学校全体で体育1位90.4、僅差で図画工作が2位90.0、家庭3位88.7である。調査結果は、前記の民間調査と近似である。けれども、3～6年生対象の「将来のために大切だと思いますか」では、正反対の結果が示された。図画工作は、74.8%の支持を得たが、

小学校全体で「大切」と思う教科の下から2番目である。ちなみに算数1位98.1, 国語2位97.8, 家庭3位96.9, 最下位音楽72.8である。つまり, 図画工作を小学生の90%が好きだが, 相対的に「大切さ」を感じていないことになる。両報告書には順位結果の記載のみで, 理由等の分析は示されていない。

表1-3 その教科学習は好きか, その教科は将来のために大切かアンケート結果

教科など	小1	小2	小3		小4		小5		小6		全体	
	好き	好き	好き	大切	好き	大切	好き	大切	好き	大切	好き	大切
国語	78.4	74.4	78.7	96.5	75.9	97.6	74.8	98.3	73.8	98.9	76.0	97.8 ②
社会	—	—	74.6	95.7	76.4	96.6	69.3	95.7	75.5	92.4	73.9	95.1
算数	77.9	76.6	83.6	97.6	80.3	98.4	72.7	98.2	75.7	98.4	77.8	98.1 ①
理科	—	—	89.6	87.5	91.6	88.4	85.6	82.3	76.5	81.7	85.8	85.0
音楽	88.7	85.4	83.6	78.6	85.1	76.9	82.5	67.2	80.2	68.4	84.2	72.8
図画工作	92.3	89.6	90.6	78.2	92.6	77.6	88.9	71.2	85.7	72.2	90.0 ②	74.8
体育	92.1	91.7	91.7	91.1	90.8	90.6	89.9	89.3	86.5	90.3	90.4 ①	90.3
家庭	—	—	—	—	—	—	91.2	96.5	86.3	97.3	88.7 ③	96.9 ③
生活	90.3	96.0	—	—	—	—	—	—	—	—	93.2	
道徳	75.5	75.6	79.2	90.3	82.1	91.4	79.9	88.7	79.0	90.2	78.6	90.1
学級活動	87.7	89.6	88.7	85.0	91.1	87.5	89.5	84.1	89.8	85.2	89.4	85.9
総合的な学習	—	—	84.3	86.7	87.6	90.4	85.5	86.9	88.8	88.8	86.6	88.2
ことばの時間	85.9	83.2	85.8	92.1	87.6	93.7	85.0	92.6	85.1	92.9	85.4	92.8
英会話の時間	89.4	88.8	90.1	96.1	89.4	96.2	86.2	95.5	84.0	95.8	88.0	95.9

※教科および生活・総合的な学習・英会話の時間と教科を含む。全体欄の①②③は順位を示す。

参考) 宇都宮市教育委員会：学習内容定着度調査 学習と生活についてのアンケート実施結果報告書, 2017年3月
2016(平成28)年12月14日調査, p.40。調査対象：宇都宮市の全ての小学1～6年29,104人

3. 図画工作を「好き」になる二つの主因

(1) 授業は子どもたちに対する「教師の愛情表現」

「好きな教科」の上位に小学生が図画工作を選んだ, 前掲両報告書が明記していない理由を考えてみたい。「授業」とは一般に, 系統的に学問や技能を教え授けることをさす。図画工作の「授業は, 子どもたちに対する教師の愛情表現である」と、『新しい学力観に立つ図画工作の授業の工夫』(図1-3)に明記されている。そして, 「子どもたちの豊かな学習活動を支えるのは教師の豊かな愛情であり, 豊かな姿勢や構えといえます」と記し, 子どもたち一人一人のよさや可能性を広げ, 学習活動を楽しみながら展開するため, 次に要約を示す七つの「教師の豊かな姿勢や構え」を例示している。教師の愛情表現が図画工作学習の中心に位置づけられ, 子どもたちの「好き」を支えてきたといえる。

① 子どもたち一人一人(以下, 一人一人)が, 自分らしい希望や夢, 豊かな



図1-3 新しい学力観に立つ図画工作の授業の工夫
文部省: 小学校図画工作指導資料, 1995, p.71

課題や意図をもつように温かい支援や共感に努める。題材設定やその提案の際に、一人一人の経験やそれに基づいた思いなどを尊重する。

- ② 一人一人が自分のよさや可能性を生かす場を広げ、一人一人の発想や構想、創造的な技能の試みに期待し、受けとめられる柔軟な姿勢や構えで、心理的・物理的にも可能な限り場や機会を広げる。
- ③ 一人一人が自分のよさや可能性を生かし、本来の旺盛な新しいことにチャレンジする冒険心、様々な思いつきの試みを安心して行える雰囲気を大切に。一人一人の人生を尊重する態度、愛情ある共感の姿勢が鍵になる。
- ④ 一人一人が、自分のよさや可能性を生かすゆとりと適切なチャンスづくりのかけがえのない場をつくるように心がける。すばらしいよさや可能性が発揮されたら、それを温かく受けとめられる心と時間のゆとりをつくる。
- ⑤ 一人一人が学び、不思議に思い、確かめ、自分の表現や試みを温める場や機会をつくる。自分で試みて成功し、学んだことは再度確かめたいと思う。実際に試みることで、自分のよさや可能性を発揮することにつながる。
- ⑥ 一人一人のよさを感じ素直に学ぶとともに、一人一人の立場に立って共感する。おとなの経験や考えや規準で子どもたちの発想・構想・表現・試みを見ないで、一人一人の思いの側に立ち、よさを感じ、共感する。
- ⑦ 一人一人が自分の思いや考え方、発想や構想、表現のよさが好きになるように学習指導を工夫する。子どもが自分のよさに気づき、自信をもち、自分を素直に好きになれる教師の心からの共感こそが評価の姿勢といえる。

(2) 体験を通して「英知」を身につける図画工作

子どもたちが図画工作を好きになる要因はもう一つある。教材のとらえ方が、他教科と異なることである。教材は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第21条に「六 教科書その他の教材の取扱いに関すること」と示されている。また、学校教育法第34条2項「前項の教科用図書以外の図書その他の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる」とあり、「保護者の経済的負担について考慮して選定しなければならない」との通達も出ている。つまり、教材はモノで、安価なことが求められている。

図画工作は、物的条件としてのモノの多様な見方やとりあげ方が他の教科と異なる。具体的なモノをこれまでの概念を越えてとらえ直し、モノに働きかけ、モノを変容させる学習活動の体験を通して英知（wisdom）を身につけさせる教科である。図1-5は小石によるその実践例の一部である。



図1-4 参考文献
松本巖：小学校教材・
教具の活用－図画工作、
帝国地方行政学会、
1970

4. 「大切」と思われない四要因と改善策

p. 3の表1-3「その教科は将来のために大切なアンケート結果」で、小学生が「好き」な教科の上位であった図画工作が、相対的に「大切」という順位が小

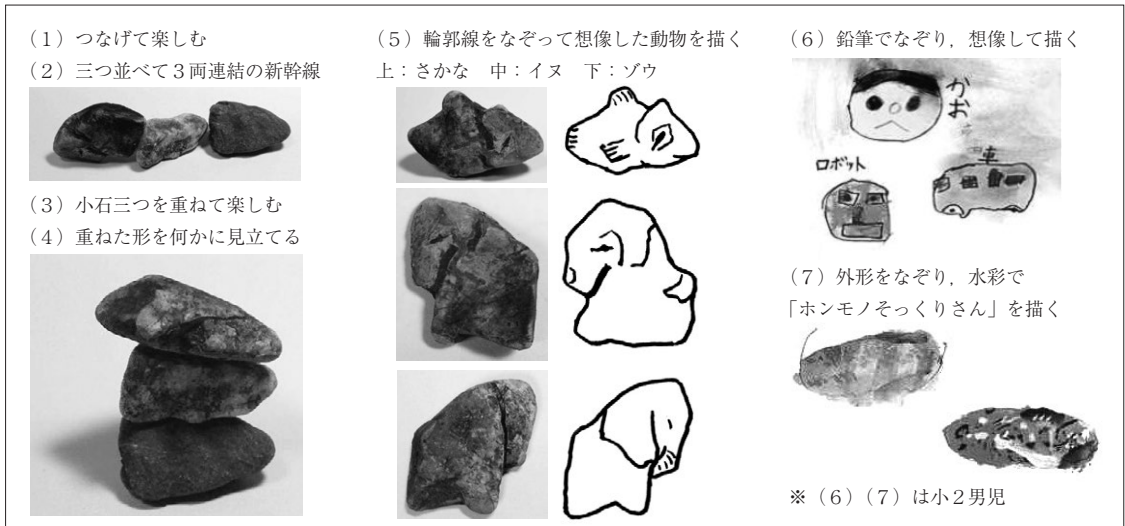


図1-5 「小石」教材をつかった多様な題材の可能性

学1年時設定の10教科中全体の9位に降下していた。20年間余に宇都宮大学で筆者が担当した図画工作受講学部生と栃木県免許状更新講習受講教員の合計2,500名余りのうち、所定の受講を通して「図画工作は嫌い・苦手」が「嫌でなくなった」や「好きになった」との記述に基づき四要因とその改善策を集約する。

(1) 授業者の学習者に対する「態度」

造形表現が得意な人で図画工作が好きでない人は、特別な場合を除き少ないであろう。大切なのは困っている学習者たちへの態度^{*1}である。ところが、勤務状況の悪化を理由に図画工作の授業中に「課題」を提示しておいてテストの丸つけをする、余白があると本人の表現意図を聞かずに「端まで塗りなさい」、展覧会入賞のために表現内容を変更させるなどの態度は、嫌悪への一途となる。大賞を受賞しても、学習者の作品に授業者が手を加えた場合は「自分の作品とは思えないので、嬉しくなかった」との悔恨の記述が数多くみられた。学習指導は、日本国憲法第13条の「個人として尊重される」の精神と不可分である。

逆に、笑顔で明るく楽しそうに語る姿、表わせずに困ったときに気軽に質問しやすい雰囲気、思うように表現できていないときに声をかけてヒントや簡単な方法を提示してくれる配慮、下手だとコンプレックスを感じている表現でも部分的なよさを指摘されるなど、学習過程での授業者の良好な態度により、不得手な人でも図画工作に興味を感じるようになったとの感想が多数あった。

(2) 造形表現が得意な人のための教科という誤解

図画工作は上手・下手を重視し、造形表現が得意な人のための教科であると誤解し、「将来、画家やデザイナーになるわけでないから」と自分を納得させ、「息抜き時間」にしていたという人も少なくない。

この改善には、誰もが不得意さから抜け出せる題材設定が求められる。学級の

*1 関心・意欲・態度

関心：ある対象への積極的選択的な心構え、感情

「何かな」

「面白そうだな」

意欲：選択した一つを目標とする能動的意志活動

「ちょっとやってみようかな」

態度：事物に対する心の構え・考え方・行動傾向

「この考え方で生活していく」

参考) 広辞苑 第六版、岩波書店、2008

※「」内は筆者が耳にした子どものことば